東南アジア研究　19巻4号　1982年3月

イグレシア・ニ・クリスト
——フィリピンの新宗教運動の一事例——

寺　田　勇　文*

Iglesia Ni Cristo: A Case Study of a New Religious Movement in the Philippines

Takefumi TERADA*

This is a preliminary attempt to examine the history of a rapidly growing Christian movement in the Philippines today, the *Iglesia Ni Cristo* (INC) or the *Church of Christ*. The INC was formally founded in Manila in 1914 by Felix Manalo. As the founder and first Executive Minister of the church, Felix Manalo exercised charismatic leadership over his members through a highly-centralized organizational structure. Believing in the doctrine of *Sugo*, which identifies Felix Manalo as *The Last Messenger of God* prophesied in the Book of Revelation, members are convinced that there is no salvation outside the INC. The INC had a remarkable growth in membership after World War II, and by 1950 members were found in almost all provinces of the Philippines. Felix Manalo died in 1963 and was succeeded by his son, Eraño Manalo, as the Executive Minister. The 1970 Census of the Philippines registered 475,407 (1.3% of the population) as INC members. Since 1968, the church has also established congregations abroad, mainly among Filipino immigrants. The INC is one of the few indigenous new religious movements to have successfully survived in the predominantly Catholic Philippine society. One of the major factors accounting for this has been the ability of the church to meet the needs of its constituents.

This paper examines the history of the movement in four periods: formative period, 1914–1921; prewar and wartime period, 1922–1945; postwar period, 1946–1962; and the period since 1963.

はじめに

東南アジアの島嶼部に位置するフィリピン共和国は，アジアで唯一の「キリスト教国」（あるいは「カトリック教国」）といわれる。これは多数のフィリピン人の間で，ステレオタイプ化された自画像として定着している。そして，そのような独自性を説明する際に，フィリピンが1898年まで3世紀以上にわたり，カトリック教国スペインの東洋植民地であったという歴史的背景と，現在でも国民の約85%がカトリック教徒である点が強調される。また，毎年繰り返されるクリスマスや聖週間の教会儀礼，町や村の守護聖人を祭る盛大なフィエスタがそれを物語っている，とされる。たしかに，南部イスラム地域を除く平地フィリピン人社会におけるカトリック教会の影響は大きい。しかし，また，多数派であるカトリック教徒社会の内部に，今世紀初頭以来，一定の宗教変化が認められることも指摘されねばならない。アメリカによる植民地化に伴い，プ

* 鹿児島大学南方海域研究センター；Research Center for the South Pacific, Kagoshima University, 21–24, Korimoto, 1-chome, Kagoshima 890, Japan

ロテスタント諸教派が伝道を開始した結果，現在のフィリピンには多種多様なプロテスタント教会がみられる。また，外国ミッションから独立した，土着的性格の強いフィリピン人のみによるキリスト教会も存在する。[1]

本稿で考察の対象とするイグレシア・ニ・クリスト (*Iglesia Ni Cristo*,[2]「キリストの教会」の意味。以下，INC と略す）は，1914年にマニラでフィリピン人フェリックス・マナロ (Felix Manalo) により創立された。この教会は，創始者マナロを「スーゴ」(*Sugo*, タガログ語で元来は，使い，代表者，大使の意味であるが，INC においては，「神の最後の使い」という意味を与えられている。英語では，The Last Messenger of God）と規定する独自の教義により，INC 信徒になる以外に救いはあり得ない，という立場を堅持している。教会創立以後，とくにカトリック教会に強い批判を加えつつ伝道をおこない，第2次世界大戦後には急速な信徒数の拡大を達成した。1970年の政府による国民の宗教に関する統計（以下，宗教センサスと呼ぶ）は，総人口の約1.3%に相当する475,407名を INC 信徒として記録し，また1968年以降は，海外の主としてフィリピン人移民社会を対象とした対外伝道の分野でも着実な成果を収めている。

INC は，フィリピンにおけるキリスト教系の新宗教運動[3] の成功例の一つである。INC は全国レベルでの教会形成に成功し，多数派であるカトリック教会の指導部に深刻な危機意識をもたらすまでの新勢力として成長しつつある。フィリピンには数多くの新宗教運動がみられるが，そのほとんどは短命に終わるか，一地方的な運動の域をこえることができず，INC のように全国レベルでの強力な運動として成長することはない。新宗教運動のライフ・サイクルは，指導者の提示する世界観の当否とともに，指導者の権威，信徒組織の形態などの様々な要因により決定される。INC は，現代のフィリピン人にどのようなメッセージを与え，それをどのように組織化してきたのであろうか。

INC 研究上の問題点は，一次資料[4] が少ないことと，その参照がきわめて困難であることにある。加えて，非信徒に対する排他性が強いために継続的な参与観察は不可能に近い。このような制約にもかかわらず，第2次大戦後，とくに外国人宣教師などによって多数の小論文（主なものは，Kavanagh [1955a; 1955b; 1961], Alonzo [1959], Sanders [1962; 1969]）が発表されてきたことは，INC の成長が既存のキリスト教各派にとって脅威となりつつある事情を反映している。INC 研究においては，サンタ・ロマーナの論文 [Sta. Romana 1955a] が最初の重要な成果として認められる。サンタ・ロマーナは，主として面接調査により，INC の歴史の再構築および運動の実態の記述をおこなった。貴重なデータを提供する論文だが，パイオニア的研究であるだけに誤りも指摘される。サンタ・ロマーナ以後の研究論文で注目されるのは，安藤による INC の投票行動の研究 [Ando 1966]，政治宗教セクト論 [Ando 1969]，アメリカ人プロテスタント宣教師タギィーによる「教

1) キリスト教系の宗教団体は，1967年現在で368，1972年現在で586が報告されている。詳細は，Elwood [1968]，および Covar [1975] を参照のこと。

2) 創立当初は，*Iglesia Ni Kristo* と表記されていたため，研究者によっては INK と略す場合もある。フィリピン人の間では *Iglesia* と呼ばれることが多い。英語による正式名は Church of Christ.

3) 新宗教運動の定義については，井門富二夫. 1973.「新興宗教」『宗教学辞典』pp. 411–417 を参照のこと。

4) 伝道文書として，Manalo, Felix. 1940. *Ang Sulo sa Ikatitiyak sa Iglesia Katoliko Apostolika Romana*（「ローマ・カトリック教会の真の性格を照らし出す光」）など数点あるが，原本の参照は困難である。フェリックス・マナロの伝記は信徒であるガルシアにより，その要約のみ [Garcia 1964] 発表されている。

会発展研究」の事例としてのINC論[Tuggy 1976], およびフィリピン人カトリック神学者エレステリオによるINCのキリスト論・教会論[Elesterio 1977]である。本稿では，現在までの研究成果を整理しつつ，運動・組織面での変化に注意しながらINCの史的発展の経緯を検討していく。

I　創始者フェリックス・マナロ

創始者フェリックス・マナロは，INC信徒の間では「ブラザー・マナロ」,[5] あるいは「神の最後の使い」と呼ばれる。

フェリックスは，1886年5月10日にマニラ近郊(現在のリサール州)のタギィグ(Taguig)町ティパス(Tipas)村で生まれた。父はマリアノ・イサグン(Mariano Ysagun)，母はボニファシア・マナロ(Bonifacia Manalo)であることから，その長男であるフェリックスの姓名は，フェリックス・M・イサグン(Felix M. Ysagun)であったが，のちに述べるように，母の死後はマナロ姓を名のるようになる。生後まもなく，タギィグ町のカトリック教会で洗礼を受けた。母は熱心なカトリック教徒で，その影響を受けてフェリックスもはやくから町の教会に通った。タギィグ町はマニラから約15キロメートル南東に位置し，バイ湖に接している。当時この地域一帯はマニラの市場に魚類を出荷していた。少年時代のフェリックスは父を助けて魚釣りや畑仕事に従事したが，10歳の時に父は死去した。父の死後，フェリックスは叔父にあたるカトリック司祭のもとに預けられた，ともいわれる[Sta. Romana 1955a: 331]。フェリックスの学校教育についてはよく知られていない。村の小学校で第2学年か第3学年まで修了した[*loc. cit.*]とも，学校には行かず，村の私塾で読み書きを習った程度[Elesterio 1977: 7]ともいわれる。1904年以前にフェリックスはマニラに出て，写真屋，金細工師，理髪店，帽子屋などの職を転々とした。その間には，コロルム講運動(Colorumism)[6] に接し，バナハウ山中でおこなわれる儀礼に参加した。

1904年のある日，フェリックスは，聖像礼拝の是非をめぐるカトリック司祭とプロテスタント牧師の公開論争の場で，牧師が聖書にもとづいて司祭の主張を論駁する場面を目撃した。これに感銘を受けたフェリックスは熱心に聖書を学び始め，同年中にメソディスト教会(Methodist Episcopal Church)に加入し，同教会の神学校(Methodist Theological Seminary)に学んだ。日々の生活は聖書の販売により支えられた。このころ母が死去したが，フェリックスはカトリック司祭による母の祝福を拒否したため，母の遺体はカトリック墓地ではなく，フィリピン独立教会(Iglesia Filipina Independiente)の墓地に埋葬された。母の死を契機としてフェリックスはマナロ姓を名のり始めた。[7]

1907年にフェリックスは長老派教会(Presbyterian Church)に移り，同教会の聖書学校(Ellinwood Bible Training School)[8] に学ん

5) タガログ語では，Ka Manalo. Kaは兄弟・姉妹を意味するkapatidの短縮形。

6) コロルム講は，1840年～1841年のアポリナリオ・デ・ラ・クルスの率いたサン・ホセ信徒団がスペイン当局により弾圧されたのち，生きのびた信徒らにより形成された共同体をその起源とするが，19世紀後半を通じてその運動は変質していった。フェリックスが参加したコロルム講とは，超自然的存在が人々に直接に語りかけるとされるバナハウ山およびサン・クリストバル山の神秘主義的な宗教結社をさす，と考えられる。

7) マナロ姓への変更については，タガログ語でmanaloが勝利を意味するため[Kavanagh 1955a: 21]という説と，ティパス村ではマナロ家の方がよく知られていた[Elesterio 1977: 8]ためという見方がある。

8) メソディスト教会と長老派教会は，当時，合同の神学校設立の準備に入っており，フェリックスの長老派への移籍は，長老派の聖書学校の教育内容がより優れていたため[Garcia 1964: 180]。

だ。1910年には，クリスチャン・ミッション派教会（Christian Mission, フィリピンでは Mision Christiana として知られた）に移り，伝道者となった。このころには，すでにタガログ語による有能な説教者として知られていた。1911年から12年の間には，セブンス・デー・アドベンティスト派（Seventh Day Adventist Church, Sabadista と呼ばれた）に移り，補教師として伝道活動に従事した。また，同教派の神学校で教鞭をとっている間には，生徒であったオノラタ・デ・グスマン（Honorata de Guzman）と知りあい，1913年5月に結婚した。フェリックスはブラカン州マロロスに赴任したが，その直後には，アドベンティスト派からも離れた。その原因は，同教派の会合でフェリックスが教義および教会運営方針をめぐって批判をおこなったためであったが，その具体的な対立点は不明である。

20世紀初頭のフィリピンは，革命敗北後のアメリカによる占領時代初期にあたるが，占領政策は思うように進まず，フィリピン社会は激しい変動のなかにあった。当時のキリスト教界は，スペイン植民地時代にみられたカトリック教会による一元的な支配体制が崩壊し，多教派時代に移行していた。アメリカのフィリピン革命への介入とほぼ同時に，同国のプロテスタント諸教派は宣教師を送りこみ，また，1902年8月にはフィリピン人カトリック司祭らがローマ教皇との決別を宣言してフィリピン独立教会を創立した。このようにカトリック教会の地位が低下するなかで，他のあらゆる教派が信徒の獲得，教勢の拡大をめざして競争していたのである。

フェリックス・マナロの個人史において，1913年半ばまでの段階で注目されるのは，カトリック教会より離れて，いくつものプロテスタント教会への加入，移籍を繰り返してきた点である。その過程でマナロは，聖書研究を深め，第一線の説教者としての経験を積み重ね，のちの INC に結実する聖書解釈，教義の検討，伝道方法などを構想しつつあった。とくに，聖書の文字通りの解釈を唯一の権威とする神学的立場，浸礼の絶対性，そして少数派として伝道する上での望ましい組織形態について学びとっている。

アドベンティスト派を離れたマナロは，しばらくは「神を信じぬ者ら」と交友を結んだ，とされている [Garcia 1964: 181] が，まもなく聖書研究を再開し，とくにカトリック教会とアドベンティスト派の神学と教会儀礼についての検討を加えた。1913年11月には，3日間にわたりマナロは自室にひきこもった。これについて，ガルシアは次のように記している。

> 二日三晩にわたり，かれ（マナロ）は，妻が心配のあまり部屋の戸をたたくまで自室にひきこもり仕事をつづけた。あまりに深く集中していたために，自分自身の肉体的必要すら忘れていた。しかし，より重要なのは，マナロが以前より頭の中にきざみこんできた思想を多量の紙に書きとめたことであった。かれの耳もとには，ヤコブの手紙4章17節の言葉が鳴りひびいていた。「人が，なすべき善を知りながら行わなければ，それは彼にとって罪である」[*loc. cit.*][9]（聖書の引用は，日本聖書協会1955年改訳版による。以下同じ）。

この出来事の直後に，マナロは財産のすべてを友人に与え，妻とともにマニラのサンタ・アナに向かった。[10] 1913年11月にマナロは

9) Sta. Romana [1955a: 334] にも，ほぼ同様の記述がみられるが，マナロがかれの思想を書きとめたという点には触れられていない。

10) これ以前にも，マナロはサンタ・アナでクリスチャン・ミッションおよびアドベンティスト派の説教者として伝道をおこなっていたことがある。

説教活動を開始した。初期の説教は労働者街の一角にあった建設会社の一室をかりておこなわれた。説教に耳をかたむけた者はわずか数名であったが，そのなかにはクリスチャン・ミッション派の信徒が含まれていた。ひきつづいて街頭説教に移ったが，マナロの主張はカトリック教会の慣行批判（告解，聖餐，洗礼の方法など），アドベンティスト派批判（土曜日を安息日とする点など）に向けられた。マナロの目的は，宗教的対立に終止符を打つことにあった，とされている [*loc. cit.*]。それは，かれ自身が信じる「真の教会」を形成することに求められた。[11]

1914年の初めに，マナロはマニラを流れるパシッグ川で約12名に対して浸礼法[12]により洗礼式をおこなった。その後，サンタ・アナの信徒の世話をフェデリコ・イノセンシオ (Federico Inocencio) とアタナシオ・モルテ (Atanacio Morte) に委ね，マナロは故郷のティパス村に向かった。そこではマナロは激しい迫害に遭遇した。少年時代のマナロを知る故郷の人々が不信感を露にしたのと，かれの説教活動が正式な許可を得ていなかったためとされている [*loc. cit.*]。この時点でマナロおよびその信徒らが「イグレシア・ニ・クリスト」という教会名を用いていたかどうかは，資料の上では不明である。しかし，固有名詞としてではなく，「キリストにつらなる教会」という意味で INC と称していたであろうことは想像できる。

11) アドベンティスト派に所属していたころ，マナロは新しく「キリストの教会」を形成する意思をもち，そのことを牧師仲間に話したところ反対された，という [Punzalan and Gaddi 1964: 43–45]。

12) キリスト教の洗礼には，全身を水中に浸す浸礼と，頭部に水をそそぐ滴礼とがある。INC においては浸礼が絶対的とされる。現在は，改宗予定者は地区の大教会に集まり教会内の浸礼用プールで洗礼を受ける。また，山間部の開拓伝道地域では100名単位で川に入っておこなうこともある。

II　創立期（1914年～1921年）[13]

1914年7月27日にマナロは，かれの指導下の教会を「イグレシア・ニ・クリスト」としてアメリカ植民地政府に登録した。[14] これにより INC は正式な認可を受けた宗教団体としての地位を確保した。INC が提出した登録文書 (Articles of Incorporation of the Iglesia Ni Kristo [INK 1914]) を検討すると，まず，本文には申請人フェリックス・マナロがイグレシア・ニ・クリストなる団体を設立し，その代表者として動産・不動産の管理権を有する旨述べられている。この本文に，当時，教会の書記であったアタナシオ・モルテによる付帯文書がつづいているが，その要点を以下にまとめる。

〔設立の会合〕マニラ市サンタ・アナのプンタにて開催され，次の点について全員一致で決議した。

〔団体名および団体の性格〕イグレシア・ニ・クリスト（この時点では *Iglesia Ni Kristo* と表記していた）とし，フィリピン諸島の法律にもとづいた法人団体とする。

〔目的〕フィリピン諸島全域で「キリストの福音」(Gospel of Christ) の教義・教えを伝道する。団体の運営は公共の募金によりまかなう。

〔代表責任者〕団体の動産・不動産はフェリックス・マナロが管理し，次の者が補佐する。

13) 本稿では INC の史的発展を重要な出来事により四つの時期に区分した。INC による正史が未刊行のため，INC 自身による時期区分を知ることはできないが，1981年1月より開催されている INC 歴史展（一般には非公開）では次の三つの区分がみられる。創立期（1914年～1946年），拡大・成長期（1946年～1963年），現在（1963年以後）。

14) アメリカ統治下では，すべての団体・結社は政府関係部局 (Office of the Division of Archieves, Patented and Properties of Literature and Executive Office of Industrial Trade Marks) への登録を義務づけられた。

ペドロ・イノセンシオ (Pedro Inocencio) 監督牧師
トマス・デ・ラ・クルス (Tomas de la Cruz)　伝道者
アタナシオ・モルテ (Atanacio Morte) 書記
ビセンテ・レイエス (Vicente Reyes) 会計
セラピオ・ディオニシオ (Serapio Dionisio)　牧師補
エングラシア・ラモス (Engracia Ramos) 牧師補
オノラタ・G・マナロ (Honorata G. Manalo)　牧師補

以上の役職者のすべての行為は，福音とフィリピン諸島の現存するすべての法律にもとづく。

〔役職者の交代〕聖書の教えにもとづいておこなう。

〔団体の存続〕1名以上の会員が存在し，団体を支持し，運営に支障をきたさない限りにおいて存続する。

〔支部の設立〕フェリックス・マナロは，必要と認められた場合，フィリピン諸島内に支部を設立する権限を有する。

〔中央本部〕マニラ市サンタ・アナのプンタに設ける。

〔設立者〕フェリックス・マナロ以下19名。[15]

1914年7月の登録時には，二つの信徒集団（あるいは支部）がサンタ・アナとタギィグとに組織されていた。正確な信徒数は不明であるが，タギィーによると受洗者（浸礼を受けて信徒となった者）は50名以内であった [Tuggy 1976: 48]。[16] 登録後には，リサール州とブラカン州（マニラに隣接）に各1名の伝道者が派遣されたが，カトリックやプロテスタント勢力による反対に遭遇した。INCへの改宗者は，のちに牧師となる者を除いては，ほぼ全員が初等教育すら受けていない貧しい人々であった。伝道活動の先頭に立ったマナロは過労のため喀血するほどであった。1915年末までには7カ所に支部が形成されているが，礼拝は信徒の家の一部をかりておこなわれ，信徒数は300名以下であった。1917年末には支部数8，約500名の信徒を有するようになり，翌1918年には他のキリスト教会よりの集団改宗者を迎え入れた。これは，以前にアメリカ人宣教師ブルース・L・クッシュナー(Bruce L. Cushner) の指導下にあったディサイプルズ (Disciples of Christ) 教会のパシッグ支部の信徒らであった。同年末までにINCは，12支部，約1,000名の信徒を有する教会に成長した。

1919年にマナロはアメリカ旅行に出発した。約1年間，カリフォルニア州の太平洋神学校 (Pacific School of Religion) において聖書研究をおこなった，といわれる [Garcia 1964: 182]。しかし同神学校にはマナロの在籍を証明する記録は残されていない [Elesterio 1977: 152]。サンタ・ロマーナは，マナロのアメリカ滞在費は，月額にして300～350ペソを教会が支給したとしている [Sta. Romana 1955a: 337] が，創立後5年の信徒総数1,000名程度の，教会堂すらもたない当時のINCにとって，このような当時としては多額の出費は不可能であったのではないか。マナロに対する有力な後援者の存在も明らかにされていない。さらに，創立後まだ日の浅い教会にとって，創始者マナロと信徒の間での対面的コミュニケーションはなによりも重要であ

15) この19名の出身地は，リサール州タギィグ（7名），マニラ市サンタ・アナ（11名），サンタ・メサ（1名）である。

16) INCは信徒数を公表していない。したがって，教会堂数や牧師の配置状況などから推定する以外にないが，Tuggy [1976] による推定信徒数が最も信頼できる。

ったはずであり，この点からも旅行期間が1年にわたったという点については疑問が残る。

1920年にマナロが帰国した時には，教会内部には深刻な問題が表出しており，信徒の間には「妬み，恨み，不満がその醜い頭をもたげ始めていた」[Garcia 1964: 182]。マナロの不在中に，信徒指導者のひとりカサノバ(Casanova)が信徒に対して，日曜日以外に水曜日ごとの礼拝への出席を義務づけていた。カサノバは，マナロに対して，信徒らが映画などに夢中になり教会活動から遠ざかり始めたための措置であったと釈明した。これに対して，マナロはカサノバの措置を認めたが，水曜日ではなく，木曜日に礼拝をおこなうように指示した，といわれる [Tuggy 1976: 56]。これ以後，INC の礼拝[17] は週に2度，日曜日の午前中と木曜日の夜におこなわれるようになった。しかし，INC 側の文書には，週2度の礼拝の起源およびその聖書的根拠に関する説明は見出されない。

さて，より深刻な問題は教会内の分派活動であった。これはマナロの私生活に関する道徳的非難を軸としたキャンペーンであった。これに対して，マナロはたとえ自分自身が個人的には無謬性をもつと断言はできないとしても，教会の教義は普遍であるという立場を堅持した [Garcia 1964: 182]。内部対立の過程で INC より離反する信徒は少なくなかった。その一例として，反マナロ・キャンペーンが最高潮に達した1922年には，ブラカン州ギギント町に派遣されていた創立以来の教会指導者であったテオフィロ・オラ (Teofilo Ora) とバシリオ・サンチアゴ (Basilio Santiago) が信徒とともに INC を離れ，それまで使用していた教会堂を町の学校に寄付した。ギギント町にいた80名以上の信徒のうち INC に残ったのは15名であった [Tuggy 1976: 57]。[18]

創立後日の浅い小セクト集団としての INC は，他のキリスト教々派より様々な形での迫害を受けてきたが，それが外圧的なものである限り，信徒間の団結を高める方向に作用した。しかし，小集団内部における創始者に対する人格的批判を契機として発生した分派活動は深刻な様相を呈した。内部危機を最少限にとどめ，再び運動を活性化させるためには，それ以前の枠をこえた指導者の権威の確立が必要とされる。マナロの場合，それはかれ自身を「神の最後の使い」とする教義の導入の形をとった。

III　戦前・戦中期（1922年～1945年）

フェリックス・マナロを「スーゴ」(「神の最後の使い」) と規定する INC の中心的教義は1922年に導入された。マナロは，かれ自身が自覚することなく神の啓示を満たしてきたことを知り，自らが「神の最後の使い」であることを宣言した [*ibid.*: 57–59]。「神の最後の使い」とは，以下に引用する『ヨハネによる黙示録』7章2-3節にみられる「もうひとりの御使」をさす。

> また，もうひとりの御使が，生ける神の印を持って，日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権

17) 礼拝は通常，その地方の言語によっておこなわれるが，マニラ，セブ，バギオなどの大都市では英語による礼拝もみられる。現在の礼拝の式順は筆者の観察によると，1955年に報告されたもの [Sta. Romana 1955a: 364–367] とほぼ同じである。

18) INC より分離したのち，独自に教会を形成したグループとしては，次の四つが知られている [Elwood 1969: 382]。*Iglesia ng Dios kay Kristo Hesus*（イエス・キリストによる神の教会），*Iglesia Edificada de Jesucristo*（イエス・キリストにより建てられた教会），*Iglesia ni Kristo Itinatag sa Herusalem*（エルサレムに建てられたキリストの教会），*Iglesia Itinayo ni Jesucristo sa Malayong Silangan*（イエス・キリストにより極東に建てられた教会）.

威を授かっている四人の御使にむかって，大声で叫んでいった，「わたしたちの神の僕らの額に，わたしたちが印をおしてしまうまでは，地と海と木とをそこなってはならない」。

ここで，「神の最後の使い」の教義を支えるINCのキリスト論および教会論の概略を述べておく。[19] INCにおいては，キリストは人であり，どのような意味でも神ではない。したがってカトリック教会にみられる三位一体論は否定される。ただし，キリストは人の上に立つ人であり，神によってこの世に遣わされ，その良き知らせを受け入れる人間は，INCの信徒となる。人間は生物学的な死からは逃れられないが，キリストによって精神的な死より救われる。キリストの血は，すべての人間のために流されたのではなく，キリストを受け入れた者，すなわちINCの信徒のみに対して流されたのであり，したがってINC以外に救いは存在しない。「キリストの身体」である教会はエルサレムにおいて，西暦33年に創立されたが，その後，その教会は信仰を捨て変節し（主としてローマ・カトリック教会をさす），1914年になって「神の御使い」の出現により再建された。「キリストの身体」である教会は，「キリストの教会」の名称をもたなくてはならず，INCがその教会である。INCの創立記念日である1914年7月27日は第1次世界大戦の開戦日にあたり，これは世界の終末の到来を告知するものとされる。『ヨハネによる黙示録』にみられる4人の御使いは第1次世界大戦参戦国の元首[20]をさし，「もうひとりの御使」であるフェリックス・マナロは「日の出る方」，すなわちフィリピン諸島より出現した，とされる。

さきに述べた通り，マナロは，本人も知らずしてこの「神の最後の使い」の使命を果たしてきたとされているのであるが，1914年の登録文書[INK 1914]には，INCは「キリストの福音」を伝道するとのみ記されており，「神の最後の使い」の教義には触れられていない。また，創立当初にマナロが，かれに与えられた特別な使命に関して，説教その他で言及したという証言もみられない。「神の最後の使い」の教義は，反マナロ・キャンペーンを軸とした分派活動が拡大していく過程で導入されたものであり，マナロのカリスマ的指導性のもとで，それを受け入れた信徒と，逆にマナロに対する不信感をさらに深めた結果INCを離れていった人々も多くいたであろう。

1922年の時点でINCは29の支部，約3,000名の信徒を有する教会であった。マニラ以外にも中部ルソン（ブラカン，パンパンガ，ヌエバ・エシーハ，タルラックの各州）で伝道がおこなわれていた。1920年代の後半には，南部ルソンでも伝道活動が開始されているが，戦前のINCの伝道上の重点は中部ルソンに置かれていた。中部ルソンはフィリピン最大の米作地帯であり，スペイン植民地時代より農民反乱などが絶えなかった地域であったが，1920年代，30年代に入ると農民層の没落が急速に進行した。1939年には同地域の農民の半数以上が小作農であった[池端 1977: 111]ことが示すように，農民の生活条件は極度に悪化していた。このような状況のなかで既存のキリスト教会は無力であったといえる。カトリック教会は主として町の中心部（ポブラシオーン）に住む人々の教会であり，村（バリオ）に住む大多数の農民にとっては，村のフィエスタ以外には司祭の姿をみる機会も

19) 教義の体系的な解説書は公刊されていないが，その骨格は『パスーゴ』誌上で繰り返し論じられている。たとえば，Manalo [1973]，Ramos [1973] など。

20) 英国のLloyd George，フランスのGeorges Clemenceau，イタリアのVittorio Orlando，アメリカのWoodraw Wilsonをさす。この場合の御使いとは，神により遣わされ，地上において，その使命を果たす者とされる。

ないほどに遠い存在であった。また，カトリック教会や修道会自体が大土地所有者である場合も少なくなかった。フィリピン独立教会はミサを土着の言語でおこなうなど民族主義的姿勢を強く打ち出してはいたが，1920年代から30年代にはすでに創立当時の勢いを失い，教会活動は縮小を余儀なくされていた。プロテスタント諸教会は，INCと同様に少数派であったが，主として都市部の知識層出身の信徒によって支えられていた。こうしたなかで，INCは「神の最後の使い」の教義にみられるように，フィリピン人が神の使いとして出現したというメッセージをもたらし，また信徒間では相互扶助体制がとられていたことから，農民らにとっては他のキリスト教会に比べて近づきやすい社会集団であったのかもしれない。実際の伝道面からみても，INCの場合は，町の中心部でまず改宗者を得て，それを基盤として村に入っていくのではなく，当時は村から村へと信徒のネットワークをたどりつつ信徒組織を拡大していくものであった。このようなINCの農民社会へのアプローチは，後述するINCの政治的影響力と結びついた時，その信徒に新しいアイデンティティーを与えることになった。

次に，INCの政治的影響力を支える信徒による投票行動を検討する。1935年9月に，第1回コモンウエルス政府（対米独立を前提とした自治政府）の大統領選挙がおこなわれ，ナショナリスタ党のマヌエル・L・ケソンが当選した。この選挙に際して，マナロは信徒の票とひきかえに，ケソンに対して行政府によるINCの法的保護を求めた，といわれる[Ando 1966: 361–363; Sta. Romana 1955a: 376–377]。INCの伝道方法の一つは，町や村の公共広場でおこなう他教会の牧師，指導者との公開論争であったが，教区司祭や町の役人などの介入により，広場の使用許可がおりないことがたびたびあったために，法律にもとづいた保護を求めたのであった。ケソン以来，大統領選挙に立候補する中央政界の政治家は事前にマナロと親交を結び，INC票を確保することが慣例となっている。

1938年後半に，マナロは2度目のアメリカ旅行をおこなった。このころまでにINCはルソン島以外にも，ビサヤ諸島(とくにセブ)に支部を形成しつつあったが，依然として財政上の問題をかかえていた。多数の信徒が一同に会するための集会場すらもたなかった。マナロのアメリカ旅行には二つの目的があった。第1にはマナロの眼の手術，第2にINCの伝道資金の調達であった。しかし，アメリカ到着後にマナロは病気になり，予定されていたインディアナ州での講演はほとんど中止となった。資金の調達は失敗に帰したが，この体験からマナロは，「INCは完全に自力で進まねばならず，2度と外国の援助に頼ってはならない」[Garcia 1964: 183]と決心した。

1939年2月には，信徒向けの定期刊行物『パスーゴ』(*Pasugo*, INCにおいては「神のメッセージ」という意味で用いられている）の刊行が開始された。これは第2次世界大戦中は休刊となったが，1951年1月より再刊され現在に至っている。

さて，1941年12月以降，フィリピンは日本軍の侵攻により第2次世界大戦にまきこまれた。日本軍軍政当局は，フィリピンがキリスト教徒が大多数を占める国であることを考慮し，占領政策上の必要からキリスト教界の指導者に対して，数多くのキリスト教々派を一つの中央組織のもとに再編成するように要請した。[21] 当局の圧力により，1942年にエンリケ・C・ソブレペーニャ(Enrique C. Sobrepeña)がフィリピン福音主義教会連盟(Philip-

21）これは，戦前の日本で1939年に帝国議会を通過し，翌年より実施された「宗教団体法」にみられるのと同様の宗教管理政策である。

pine Federation of Evangelical Churches) の代表となり，プロテスタント各教派の結集を図った。INC はこの連盟に参加した，といわれる [Sobrepeña 1954: 58]。[22] 他の教会と同様に INC も，軍政当局に対して説教内容や財政に関して定期的に報告する義務を課せられた。また，マナロ自身は反日ゲリラの協力者[23] の疑いをもたれた結果，教会の指導者として公の席に出ることはできなかった [Garcia 1964: 183]。占領下においても礼拝や伝道活動は継続されたが，現状維持以上の成果は得られなかった。そして信徒らは戦火を逃れてフィリピン全土に離散していったが，このことが戦後期の INC の教勢の拡大の基盤となった。

IV 戦後期（1946年～1962年）

第2次世界大戦の終結後，フィリピンのあらゆる教会は，戦時中の荒廃から立ち直るべく教会の再建に着手した。INC もいちはやく再建活動を開始した教会の一つであったが，他の教派（とくにカトリック教会やアメリカに本部をもつプロテスタント諸教派）と異なり，自力で再建にあたらなくてはならなかった。このような苦境にあって幸いしたのは，INC においては，戦時中も信徒間の連絡が比較的よく保たれていた点であり，全国に離散していた信徒らが各々の地域において伝道の基盤を積極的に築いていったことであった。教会再建が，単なる再建にとどまることなく，信徒数の拡大という形で成果を収めつつあったことは，1948年の共和国政府による国勢調査からうかがい知ることができる。宗教センサスはそれ以前にも1918年と1939年に実施されているが，INC が独立した集計項目として扱われたのは1948年が初めてのことであった（表1を参照）。それによると，INC 信徒数は88,125名（国民の約0.5%）であった。

1948年に INC は，1914年の登録文書に対する修正文書 (Amended Articles of Incorporation of the Iglesia Ni Cristo [INC 1948]) を政府に提出した。その要点は以下の通りである。

〔団体の法的性格〕フィリピン共和国の法律に従い，単一の代表者により運営される法人団体とする。

〔目的〕キリストの福音の教義と教えをフィリピン，および牧師，信徒が到達し得るフィリピン以外の場所において伝道し，福音あるいは聖書にもとづき人類をして神への献身に向かわせること。

〔INC の聖書的根拠〕INC の出現は，聖書に示された啓示，すなわち『ヨハネによる黙示録』7章2-3節，『イザヤ書』46章11節および43章6-7節の予言と一致するものであり，INC は聖書にもとづいて機能する。また，INC の運営は，現存の，あるいは今後定められる内規[24] にもとづく。

〔代表者〕監督 (Executive Minister) であるフェリックス・マナロは，すべての事柄に関して正式な代表者として行動し，地区主任牧師 (Division Ministers) 会議，総幹事 (General Secretary)，財務 (General Treasurer)，その他の役職者により補佐される。

22) ガルシアは，マナロは他の諸教会と INC が教義の面で一致することはあり得ないとして連盟への加盟を拒否した，としている [Garcia 1964: 183]。

23) マナロは反日ゲリラに対して食糧，医薬品，現金などを援助していた。マナロにかわって次の者が名目上，教会の指導者の地位についた。Prudencio Vasquez, Benjamin Santiago, Teodoro Santiago の3名 [Elesterio 1977: 13]。

24) INC の内規と考えられる文書 (The Doctrine Necessarily to be Observed by the Ministers of the Church of Christ; The Interior Constitution of the Church of Christ in the Philippine Islands) は，Elesterio [1977: 174-196] に収められているが，その真偽について INC 側は正式な認定を避けている。

表1　国勢調査にみられる宗教センサスの推移（1918年～1970年）

	1918年	1939年	1948年	1960年	1970年
ローマ・カトリック教会	7,790,937 (75.5%)	12,603,365 (78.8)	15,941,422 (82.9)	22,686,096 (83.8)	31,169,488 (85.0)
フィリピン独立教会	1,417,448 (13.7)	1,573,608 (9.8)	1,456,114 (7.6)	1,414,431 (5.2)	1,434,688 (3.9)
プロテスタント諸教派	124,575 (1.2)	378,361 (2.4)	444,491 (2.3)	785,399 (2.9)	1,122,999 (3.1)
イグレシア・ニ・クリスト	——	——	88,125 (0.5)	270,104 (1.0)	475,407 (1.3)
イスラム教	443,037 (4.3)	677,903 (4.2)	791,817 (4.1)	1,317,475 (4.9)	1,584,963 (4.3)
その他*	538,313 (5.2)	767,066 (4.8)	512,213 (2.7)	614,180 (2.3)	896,941 (2.4)
総人口	10,314,310 (100.0)	16,000,303 (100.0)	19,234,182 (100.0)	27,087,685 (100.0)	36,684,486 (100.0)

* 仏教，神道，無宗教などが含まれる。

〔運営〕信徒が『コリント人への第1の手紙』16章1-2節，『コリント人への第2の手紙』9章7節にもとづいて教会を支持する限り教会は存続する。

〔経済協議会 (Economic Council)〕監督は教会の運営に関する一般権限とともに教会の動産・不動産の管理権を有する。ただし，教会の経済協議会による事前の承認を必要とする。協議会は監督を議長とし，地区主任牧師，総幹事，財務をその構成員とする。

〔中央本部〕リサール州サン・フアン・デル・モンテ町に置く。

〔支部の設立〕監督の同意を必要とする。

以上は，1948年3月15日に中央本部にて開催された教会会議で出席者28名によって決議され，4月1日に修正文書として政府の関係部局に提出されたが，1952年9月17日付でINCは撤回を申し出ている[Elesterio 1977: 135–136]。そのために，たとえば経済協議会などが実際に組織されたのかどうかは不明である。しかし，この1948年の修正文書から当時のINCの内部事情の一端を知ることができる。第1に，1922年に明らかにされた「神の最後の使い」の教義がINCの成立根拠として述べられていること，第2に外国伝道の可能性が検討されていること，第3に教会財産の運用に関して，経済協議会の設立が明記されていることである。第2，第3の点は，戦後期に入って急激に拡大の一途をたどり始めていたINCの伝道活動に対応してなされた措置であった。また地区主任牧師などの役職にみられるように，1948年にはすでに現在のINCの中央集権的組織系統が確立されていたと考えられる。図1はINCの組織系統の概略を示すものであるが，監督はINCの代表者として頂点に立ち，役職者，牧師の任免権を初め教会運営上の権限を有する。それには，聖書の解釈権，礼拝や牧師の聖書研究の内容の決定権も含まれる。総幹事，財務，監査 (General Auditor) および法律顧問 (Legal Counselors) の役職者は監督の側近として中央指導部を構成する。法律顧問以外は全員INCの牧師職を兼任する。日常的に信徒と接触し，礼拝をおこなうのは地区主任牧師と各

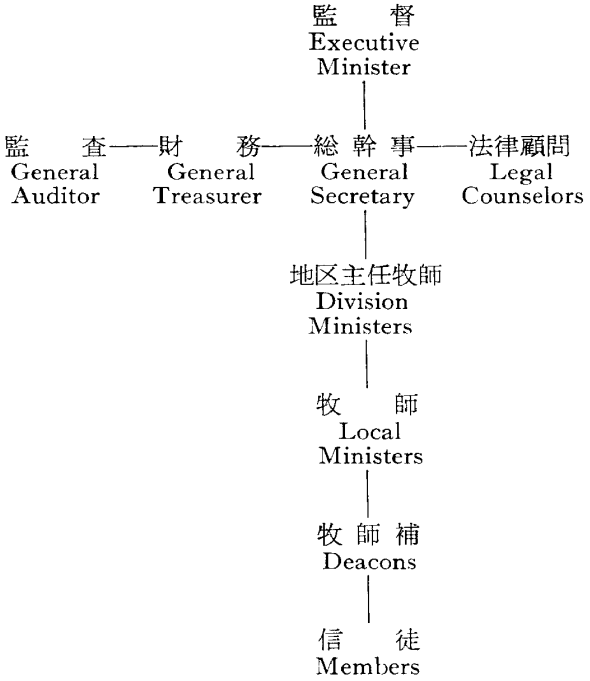

図1　組織系統の概略

個教会（支部）牧師 (Local Ministers) であるが，前者は通常，各州および各市に1名ずつ配置されその地区を代表する。牧師の妻帯は許されているが，女性牧師はみあたらない。牧師補 (Deacons) は信徒のなかから選ばれた男女であるが，正式の牧師職ではなく，礼拝の準備，献金の回収，地域内での伝道などに従事する。一般信徒は，10名内外で居住地ごとに地域委員会 (Local Committees) を構成し，牧師および牧師補の指導のもとに信徒間での相互扶助活動をおこなう。

ところで，戦後期の INC の伝道面にみられる変化の一つは，その改宗者があらゆる社会階層から出てきていることである。戦前の貧しい者の教会という INC のイメージは現在でもなお一般のフィリピン人の間に刻みこまれてはいるが，INC は戦後期に入ると社会的地位と教育程度の高い者（学校教師，医師，公務員など）を信徒として迎え入れている。また，INC の地理的拡大は，戦前においては1年にほぼ1州の割合で進められてきたが，1947年には3州，48年には4州，49年には5州，そして1950年には8州に進出している [Tuggy　1976: 73]。このように加速度的拡大をとげた結果，1950年末までには，ルソン島北部の山岳州とミンダナオ島のイスラム地域を除いたフィリピン全土に支部を設立した。戦後期の急激な教勢の拡大は，戦時中に全国に離散した信徒らによる伝道活動に，戦後とくに著しくなった国内移民現象（ルソン島よりビサヤ諸島，ミンダナオ島へ）や工業化・都市化に起因する社会移動の増大が重なったためと考えられる。また，内部的には，前述の修正文書にみられるように，教会の急成長を支える体制の確立が有効に作用したことはいうまでもない。

1950年代に入ると，他のキリスト教会も戦時中の停滞から立ち上がり，それとともに INC に対する反対活動は以前にもまして露骨になった。独立後まもないフィリピン共和国政府は，国内に反政府ゲリラ問題をかかえ，またアメリカのマッカーシズムの影響を受けて反共主義を強く標榜していた。このような社会的風潮のなかで，カトリック教会指導層が中心となり，INC を共産主義運動と類似する洗脳運動とみなし，民主主義の敵であるとするキャンペーンがおこなわれた。しかし，全国政治のレベルでは，フェリックス・マナロは各時期の大統領と親交を結んできたという側面もみられ，カトリック教会指導層のかかえ込んだジレンマは深刻であった。

1953年1月28日には，INC の牧師会議が開催され，59名の出席者により，フェリックス・マナロの将来の後継者としてマナロの三男であるエラーニョ・マナロ (Eraño Manalo) が選出された [Elesterio　1977: 141–143]。病気がちとなったフェリックスは，徐々に教会内の仕事をエラーニョに委ねることにより，後継者の育成にあたった。晩年のフェリックス・マナロは，かつての教会創立時代に想い

を馳せ，INCより離れていった昔の友人らが再び信仰をとりもどし教会に復帰するように願っていた，といわれる[Garcia　1964: 183]。1960年の宗教センサスは，信徒数270,104名(国民の約1.0%)を記録した（表1参照)。

V　現在まで（1963年以後）

創始者フェリックス・マナロは胃癌のため1963年4月12日に77歳で死去した。すでに決められていた通り，息子のエラーニョ・マナロが監督の地位を継承した。この交代はスムーズにおこなわれ，教会内部で対立が生じた気配はない。1963年にエラーニョが明らかにした教会の教勢は，信徒数350万名，支部教会数1,250，大教会数35である，といわれる[Caliwag　1963]。これが実勢であったとすれば，フィリピン国民の1割はINC信徒であることになる。1960年と1970年の宗教センサスからみて，この数字はそのまま信じることはできないが，INCがもはや無視することのできない強力な教会として存在していたことはたしかである。

エラーニョは就任直後に，創始者の定めた方針を変更する意思のないことを明らかにした。教義面ではたしかにその通りであるが，教会活動の具体面においては，新しい政策が実行に移されている。その主なものをみていくと，まず，それ以前の伝道のみの姿勢から，信徒の生活保障の組織化，さらには非信徒をも対象とした広範な社会奉仕活動をおこなう方向への変化があげられる。

以前よりINCは，信徒で必要とする者に対しては小資本を貸しつけることにより，養豚業やサリ・サリ・ストア（日用食品，煙草などを販売する小規模の店）の経営を援助したり，失業中の者に仕事を斡旋したりしていた[Ando　1969: 342]が，このような信徒に対する生活保障をより組織化したものとして，次に述べる農村共同体の育成がみられる。

INC信徒には，教会により定められたいくつかの行動規律があるが，その一つは労働組合への加入が禁じられていることである。これは1959年に内規として定められたといわれる[Deats　1967: 26]が，その根拠は，信徒の間に争いがあってはならない，という聖書の教えにあるとされる。1961年には宗教的信条による労働組合非加入の権利が，共和国法令第3350号のフィリピン議会通過により認められた。その直後に，タルラック州内の大規模な農場であるアシエンダ・ルイシタ(Hacienda Luisita)で150名近いINC信徒が労働組合を脱退した。組合はアシエンダの経営者に圧力をかけた結果，これらのINC信徒は解雇処分を受けたが，INCの中央本部はヌエバ・エシーハ州内に600ヘクタールの土地を購入し，失業した信徒の収容計画を進めた。教会堂を中心として建設された信徒共同体は，1965年以後はバリオ・マリガヤ（Barrio Maligaya, 幸福村）と呼ばれ約200家族が生活をともにしている。バリオ・マリガヤは理想的な土地改革，農村開発プロジェクトの先例として政府からも注目されてきているが，このような信徒共同体は現在，他に8カ所建設されている[INC　1980a]。

非信徒をも対象としたINCの社会奉仕活動としてよく知られているのは，家族計画推進キャンペーンである。カトリック教会は積極的な産児制限には反対の立場を堅持しているが，INCは州レベルで行政当局に協力し，このキャンペーンに努めている。また，1970年代に入ると，より組織的な地域社会に対する福祉プログラムが開始された。これは医療相談，栄養の改善，地域衛生の向上を目的として，信徒である医師，看護婦，助産婦，栄養士がチームを組んで地域を巡回し，非信徒に対しても無料でサービスを提供している。

INCの外国伝道は，すでに1948年にその可

能性が検討されていたが，最初の正式な海外支部は1968年7月27日（INC 創立54周年記念日）にハワイ州エワに設立された。外国における伝道方法は基本的にはフィリピン国内と同様で，まず近隣に散らばっている信徒が定期的に一同に会し祈禱会 (Committee-Prayer Groups) を組織する。信徒が一定数に達し，定期的な活動がある程度軌道にのった段階で，その国の主要教会あるいはフィリピンの中央本部より牧師が派遣され，教会堂を購入または建設し正式の支部教会 (Congregations) が設立される。INC の中央本部（現在はケソン市に置かれている）内には対外伝道部があり，各国の支部教会との連絡にあたり，また，1979年にはサン・フランシスコにアメリカとカナダの西海岸一帯の教会を管轄する伝道本部が設立されている。1979年末までには31カ国[25]に祈禱会および支部教会が置かれている。外国の信徒の大多数はフィリピン人移民，長期滞在者とその家族である。たとえばアメリカには，19州に支部教会が46，祈禱会が13みられる（1979年末現在）が，そのうち28教会はハワイおよび西海岸地帯に集中しており，これはアメリカにおけるフィリピン人移民の地理的分布と合致している。中近東の石油産出国にも多数の祈禱会が置かれているが，これは1970年代後半に始まったフィリピン人出稼ぎ労働者の同地域への集中に対応している。しかし，中近東での労働契約は通常2～3年であるため，支部教会の設立は困難であろう。日本国内にも6カ所[26]に祈禱会がみられるが，在日米軍基地に勤務するフィリピン人（フィリピン系アメリカ人）を主な対象としている。

1972年9月21日にマルコス大統領はフィリピン全土に戒厳令を布告した。戒厳令下のマス・メディア対策により INC のラジオ放送局 (Eagle Broadcasting Company) は一時閉鎖され，また，『パスーゴ』も一時的な休刊を余儀なくされた。INC は公にはマルコス政権を積極的に支持する姿勢を示してはいないが，マルコスの提唱する新社会政策には全体として協調的である。また，エラーニョ・マナロとマルコス大統領との親交は1969年の大統領選挙以来とくに深められている [Tuggy 1976: 96]。

1970年の宗教センサスによると，INC の信徒数は475,407名（国民の約1.3％）である（表1参照）。また，1973年に INC が公表した数字による [Sandoval 1973: 2ff] と，エラーニョ・マナロ時代の初めの10年間（1963年～1973年）に，教会行政上の単位としての地区 (Division) は45から64，各個教会（支部）は2,067から2,584，牧師数は914から1,902名，また，大教会堂は40から137へと増加している。

む　す　び

本稿では，INC の史的発展の経緯を四つの時期に区分して検討してきた。1913年11月にフェリックス・マナロにより始められた説教活動は，1914年初めまでに約12名の改宗者を得，同年7月に「イグレシア・ニ・クリスト」として組織化された。1922年には，「神の最後の使い」の教義が導入され，フィリピンに独自のキリスト教会として発展していく基礎が固められた。戦前期においては，主としてルソン島を中心とした小セクトにすぎなかったが，戦後期に入ると急激な教勢の拡大を達成し，1950年末までにはほぼフィリピン全土に

25) 31カ国は次の通り。米国（グアムを含む），カナダ，メキシコ，ブラジル，日本，台湾，タイ，マレーシア，ニュー・ギニア，イラン，イラク，イスラエル，エジプト，クウェート，カタール，バーレーン，サウジ・アラビア，アラブ首長国連邦，オーストラリア，西ドイツ，スイス，スペイン，英国，イタリア，ギリシア，ノルウェー，オーストリア，ナイジェリア，南アフリカ，アルジェリア，ザンビア。INC [1980b: 55–60] による。

26) 三沢，東京，横須賀，横浜，岩国，沖縄の各地。

進出した。1963年には，創始者フェリックス・マナロの死去に伴い，エラーニョ・マナロが監督の地位を継承し，それ以後は，フェリックス・マナロが築き上げた神学的基礎を堅持しつつ，せまい意味での教会活動の枠をこえて，多方面での社会奉仕活動を開始した。1968年以降は海外のフィリピン人社会に対する伝道も積極的に進めるようになった。INCは，現在，カトリック教会，フィリピン独立教会につぐ第3の教会として依然として成長しつつある。INC の発展を支えた要因として，(1)フェリックス・マナロのカリスマ的指導力，(2)中央集権的で能率的な組織，(3)信徒間にみられる相互支援態勢，(4)ブロック投票による政治的影響力，(5)教義および運動面にみられる土着的性格，を指摘することができる。

今後の INC 研究の課題として次の3点が指摘されよう。まず第1に，困難な作業ではあるが一次資料を収集し，また『パスーゴ』誌の内容分析をさらに深めることにより，INCの史的発展をより詳細に検証していくことである。第2に，INC 信徒の実際の行動様式を町あるいは村レベルで明らかにすることである。第3に，フィリピン社会内のどのような文化要素が，INC においてどのように吸収，強調，あるいは拒絶されているかという点を検討していくことである。一例をあげると，カトリック教徒の間では聖像に対する心情的一体性が強くみられる。とくに幼年時代のイエズス像や聖母マリア像は，ロザリオの祈りを捧げる対象であるとともに，手で触れ，口づけをし，聖像の顔よりにじみ出てくると信じられる汗をハンカチで拭う対象でもある。これはフィリピン人カトリック教徒の精神世界を支える重要な部分であるが，INC 信徒はこのような多数のフィリピン人に共有される慣行から完全に自己を切り離すことができているのであろうか。あるいは，カトリック教徒にとっての聖像に対する心情的一体性は，INC においては別の形式によってその表現の場を与えられているのであろうか。以上は一例にすぎないが，今後の INC 研究においては，INC 信徒の実際の行動様式をフィリピン文化の枠内で理解していくことが必要とされる。

参考文献

Alonzo, Manuel P. Jr. 1959. *A Historico-Critical Study on the Iglesia Ni Kristo.* Manila: U.S.T. Press.

Ando, Hirofumi. 1966. The Altar and the Ballot Box: The Iglesia Ni Kristo in the 1965 Philippine Elections. *Philippine Journal of Public Administration* 10(4).

————. 1969. A Study of the Iglesia Ni Cristo: A Politico-Religious Sect in the Philippines. *Pacific Affairs* 42(3).

Caliwag, Felix M. 1963. (An Article on INC.) *Sunday Time's Magazine* (April 28).

Covar, Prospero R. 1975. *Philippine Folk Christianity.* Quezon City: Philippine Social Science Council. (Mimeographed)

Deats, Richard L. 1967. Iglesia Ni Kristo: Pioneer in Church-Sponsored Land Reform. *Church and Community* 7(5).

Elesterio, Fernando G. 1977. *The Iglesia Ni Kristo: It's Christology and Ecclesiology.* Cardinal Bea Institute, Loyola School of Theology, Ateneo de Manila University.

Elwood, Douglas J. 1968. *Churches and Sects in the Philippines.* Dumaguete City: Silliman University.

————. 1969. Varieties of Christianity in the Philippines. In *Studies in Philippine Church History*, edited by Gerald H. Anderson. Ithaca: Cornell University Press.

Garcia, Dolores G. 1964. Felix Manalo: The Man and His Mission. *Pasugo* (July).

Guanzon, Ma. Angeles C. 1977. An Analysis of Religious Leadership in the Iglesia Ni Kristo. In *Filipino Religious Psychology*, edited by Leonardo N. Mercado. Tacloban City: Divine Word University Publications.

Iglesia Ni Cristo [INC]. 1948. Amended Articles of Incorporation of the Iglesia Ni Cristo. (Sta. Romana [1955a: 416–418] に所収)

———. 1980a. Iglesia Ni Cristo Marks 66th Anniversary Today. *Bulletin Today* (July 27).

———. 1980b. *Pasugo* (Jan.–Feb.) 他，多数.

———. n.d. *This is the Iglesia Ni Cristo —Chruch of Christ.*

Iglesia Ni Kristo [INK]. 1914. Articles of Incorporation of the Iglesia Ni Kristo. (Sta. Romana [1955a: 414–416] に所収)

池端雪浦. 1977.「フィリピン」『東南アジア現代史 II』東京：山川出版社.

Kavanagh, Joseph J. 1955a. The Iglesia Ni Cristo. *Philippine Studies* 3(1).

———. 1955b. The Stars That Fall and Mr. Manalo. *Philippine Studies* 3(3).

———. 1961. The Voice of the Iglesia Ni Cristo: 1951–1961. *Philippine Studies* 9(4).

Manalo, Eduardo V. 1973. Verses in the Bible that are Misinterpreted to Prove that Jesus Christ is God. *Pasugo* (Feb.).

Punzalan, Fred.; and Gaddi, Carlito C. 1964. Ang mga Kapatid na Natawag noong 1914 na Nabubuhay hanggang Ngayon. *Pasugo* (July).

Ramos, Teofilo C. 1973. Ang Kahulugan ng nasa Anyong Dios. *Pasugo* (Feb.).

Sanders, Albert J. 1962. *A Protestant View of the Iglesia Ni Cristo.* Quezon City: Philippine Federation of Christian Churches.

———. 1969. An Appraisal of the Iglesia Ni Cristo. In *Studies in Philippine Church History*, edited by Gerald H. Anderson. Ithaca: Cornell University Press.

Sandoval, Cipriano. 1973. Within a Span of Ten Years. *Pasugo* (June).

Sobrepeña, Enrique C. 1954. *That They May Be One.* Manila: United Church of Christ in the Philippines.

Sta. Romana, Julita Reyes. 1955a. The Iglesia Ni Kristo: A Study. *Journal of East Asiatic Studies* 4(3).

———. 1955b. Membership and the Norm of Discipline in the Iglesia Ni Kristo. *Philippine Sociological Review* 3(1).

———. 1967. The Iglesia Ni Kristo: It's Rise to A Progressive Militant Minority. *Graphic* (March 22).

Tuggy, Arthur L. 1976. *Iglesia Ni Cristo: A Study in Independent Church Dynamics.* Quezon City: Conservative Baptist Publishing, Inc.